

コレクティブハウジング社 宮前真理子さん

聞き手 協同総研 菊地 謙

東京都荒川区東日暮里に今年6月、日本の多世代型コレクティブハウス「かんかん森」が誕生しました。コレクティブハウスは、入居者が家賃の一部を出し合い共有スペースをつくって共同利用するほか、生活の一部を協同化することにより、より豊かな「住まい方」を追求する集合住宅です。

海外での調査も行い、このプロジェクトを推進してきたNPOコレクティブハウジング社の宮前さんに、暮らしと協同を巡る内外の状況と日本での可能性について、お話を伺いました。(インタビュー日：2003.6.24)

宮前さんがコレクティブハウジングの活動に関わるようになったきっかけを。

私は設計事務所に勤めて20年間、再開発事業などの仕事をやってきました。再開発事業というのは、大きな資本と行政の補助金で成り立っていて、地域に住んでいる人たちの意向を生かすことが難しいということが何度もありました。一般に建て替えをすると建物の単価が高くなってしまって、例えばそれまで100㎡でやっていた人は50㎡、30㎡だっ

新 協同人に聞く

た人は15㎡しか手に入れることができなくなる。すると、もう商売が成り立たなくなったり、暮らし自体が成り立たなくなって、住み続けることもできなくなり、コミュニティも壊れていきます。でも駅前広場と立派なビルや大型店はできる。結局、「地域社会が存続しにくくなるのが再開発なのか?」「長年培った物を壊していくような方法論しかないのか?」という疑問を持ち続けてきました。

10年ほど前、そんなことで悩んでいた時に、たまたまコレクティブハウジングのセミナーに友人が誘ってくれて、行って見たところ、スウェーデンでは住まい手が自分たちで企画し、自分たちで担いながら自分たちの暮らしをつくっていく、という話だったんです。当時ある再開発事業でそんなことをやれないかと考えていたので「もうやっている人たちがいる!こういう方式が可能なんだ!」と衝撃を受けました。やはり日本では「お上」意識が強く、街を市民の手でつくっていく、ということがなかなかイメージができなくて、結局お金が動くというだけになってしまうので、「ここに探していたものがある」と直感的に思ったんです。それでこの方法論をもっと日本の中で使っていけたら、というのが最初の出会いできっかけです。

コレクティブハウスの歴史

コレクティブハウスの歴史や経緯について簡単にお話し下さい。

スウェーデンやデンマークで始まった住み方なんですけれども、あちらは誰でも職業を持ち、18歳になったら自立するというのが普通なんです。スウェーデンでは1930年くらいから、こういう暮らし方が出てきているのですが、ユートピア思想のような物が発端

にあり、経済成長に合わせて働き手を確保し効率よく働くためにどうするか、という発想があって、家事を合理的にサービス化(外部化)してしまう、サービスモデルというのが最初の形です。

ですからまるでホテルのようで、大規模な集合住宅で、食事や洗濯、掃除など家事サービスつきなのです。当時のフィルムを見ると家にダムウェーター(小型の給食用リフト)があって、そこに「本日のメニュー」で注文すると下の厨房から食事が上がってきて、食べ終わったら洗い物はまたダムウェーターに乗せて降ろすんです(笑)。ランドリーも洗濯物をクリーニングに出す。掃除も部屋にいない間にやってくれる。もちろん保育所は完備です。その代わりお金は払うので、サービスを買うという形ですね。それで当人たちは労働力としてしっかり働く、と社会事業的にやろうとしたのが始まりなんです。大規模じゃないと成り立たないので200戸、300戸というものだったようです。

ところが、それをやっていると家族の生活が失われるということが出てきて、その反省として1970年代に、BiG(Bo i Gemenskap: “コミュニティに住む”という意味)という女性10人くらいのグループが生まれ、「生活を取り戻そう」という運動が起こってきたんです。もっと自分たちで担い合って合理化し、家庭生活も子どもに伝えるものも自分たちの手の中でやっていこうというその運動を経て、30戸くらいの小規模で自分たちで働くこと(セルフワーキング)で担っていくというスタイルが出てきました。

歴史としては、このように社会事業的に労働力の供給や女性の開放を目的として導入されましたが、家庭生活は単に合理化すればいいというものではないので、BiGのような運

動が起こったわけです。現在は、あちらでもさまざまな小規模タイプ、特に子育て期の人の住まいとして非常に流通しています。日本では神戸の震災の後に高齢期の人のためのコレクティブハウスが導入されましたが、むこうは高齢期のためというのはほとんどなくて、子育て期の家事を協同化するという発想が強いですね。

やはりスウェーデンなどは国の制度として援助があるのですか？

むこうは、住宅は建設省管轄ではなく日本では言えば厚生省管轄なんです。住まいに対する



宮前 眞理子 (みやまえ まりこ)

1975年 日本女子大住居学科卒
(株)コミュニティ企画研究所において都市計画、街づくり、再開発事業などに従事。

1998年 コレクティブハウス実現を目指して、アトリエ エスパス一級建築士事務所を開き独立。

2000年 NPO コレクティブハウジング社(CHC)を仲間と共に設立。2003年5月に完成した第1号コレクティブハウスかんかん森PJ 担当責任者。

考え方が日本と全く違っていて、当然の人権を守るために快適なある規模の住宅を供給するのは国の責任になっています。国民一人当たりの最低面積も決められており、家族が増えれば広い家に住まなければならないのですが、代わりに補助もあるわけです。日本ではやむを得ずスシ詰め状態で住んでいる人もいますが、それは違法になってしまいます(笑)。

住宅供給については、市民がお金を積み立てて居住権を買う住宅協同組合方式と自治体が資本を100%出してつくる住宅供給会社方式(日本の公社のようなもの)があります。ほとんどが賃貸住宅供給ですが、協同でプロジェクトを立ち上げて人を集めアパート建設をしたい人々の要望に答えるメニューもあります。自治体は住宅供給会社の設立には資本金を出しますが、立ち上げて以降は一切出さず、同じような会社と競争しつつ自分たちで経営しなければなりません。経営のポイントは国から与えられる低利子ローンですが、沢山の居住者を集めるために魅力的なプロジェクトをつくり、新築より改築で投資をおさえるなど努力しています。コレクティブの暮らし方をする人たちは、スウェーデンでも少数派で、今は政権の変化により民活、民営の方向が顕著で、むしろデザイナーズマンションのようなものに目が向いているという実態もあります。さまざまな暮らし方のメニューのひとつとして選択できるようになっています。

その住宅供給会社についてももう少し説明してください。

フェルドクネッペンというコレクティブを供給した「ストックホルム市住宅供給会社」

は社員700人供給戸数31,000戸、他に賃貸用オフィス40万㎡を所有しています。資本金は100%市の予算から出され、経常収支は+ - 0が常に期待されるノンプロフィット会社です。特殊なところは、同様の会社が同じ市議会の基に競合し、独立して運営されているというところでしょう。ストックホルム市の供給する住宅は160万戸以上あります。ほとんどの自治体は住宅登録所をもっており、無料で斡旋サービスをうけられます。どこかに引っ越したいというときには希望を書いて登録しウエイティングできます。隣人とトラブルなどで緊急に引っ越したい時も、地下鉄で20分中心を離れば、即日か遅くも2日後くらいには引っ越せるのだそうです。

フェルドクネッペンは友人同士が集まって、子どもが成長した後に、もっと楽しく自分たちの暮らしをつくりたい、というところから始まったのですが、自分たちでの土地探しがいかに、供給会社に相談して土地、建物の供給を受け、実現したコレクティブハウスです。

このように市民が企画を持ち込む先でもあります。フェルドクネッペンの場合、参加者それぞれの設計要望に対応したので、設計コストは相当なものになったそうですが、住宅供給会社の全国連合組織から、1年にも渡る設計期間中、設計者に補助が出ています。よい水準の住宅をつくるために重要な設計の費用を誰が持つかということは、日本のコレクティブでも大きな問題です。そういうところでは、このようなノンプロフィット会社のいい意味の競合や柔軟な仕組みづくりの姿勢は学ぶものが大きいと思います。

住宅協同組合についても説明してください。

住宅協同組合は、会員が住宅取得を目指し

て貯蓄をし、その資金をもとに、住宅建設が進められる仕組みです。最大の住宅協同組合 HSB は 全国に 63 万人の会員がいます。

居住者は積み立てなどで最初に居住権を取得し、毎月の家賃と管理費を払い、退居する時は居住権を売却できます。HSB の理事は半数が居住者で構成され居住者のニーズが事業に反映される仕組みを持っています。当然コレクティブハウジングについても組合員のニーズが供給につながっています。

世界的にもコレクティブハウス(Collective House)という名称なのですか？

国によって微妙に違うんですが、スウェーデン、デンマークではコレクティブハウスと言っています。アメリカではコウハウジング(Co-Housing)と呼んでいます。もともとアメリカの建築家の夫婦がデンマークから輸入したもので、工場を改造して自分たちの住まいをつくることから始まっています。彼らはワークショップ形式で住まい手の人たちにノウハウを教え、建設フローにそって自立的に活動をさせたら必要に応じて専門家を紹介あるいは、専門的なアドバイスをするだけで、後は手を引いてしまうというスタイルで、日本の私たちのようにずっとコーディネーターはしないようです。

アメリカでも普及しているのですか？

アメリカは少しは普及しましたね。5、6年の間に 50 棟、現在は 100 棟くらいあるのではないのでしょうか。多いかと言われるとそうでもないかも知れませんが、日本に比べると、やはりよく普及し、選択肢の一つにはなっていると思います。

コーポラティブハウス(Cooperative House)というのは…。

コーポラティブとはつまり土地を共同で買うことや壁を共同化することで費用を安くす

る、という建設(=ハード)の方式です。コレクティブはそれとは違ってむしろ「暮らし方」(=ソフト)の仕組みのことを言っています。もちろん、コーポラティブも何年もかけて話し合いをしていくものだから人間関係も出来て、住むときにはそれなりにかなりのコミュニティが出来上がっているのですが、日本ではやはり資産形成というスタンスでハウジングが行われてしまうので、コーポラティブ方式では暮らしの協同化とか共同スペースを持つことには限界があるようですね。結局「このスペースは誰の資産か？」と思った時にもめてしまうようです。その意識を取り払うのにあまりにも労力があると判断して、私たちはひとまず資産形成に重きを置かない賃貸方式でやっています。

日本でのコレクティブハウス

やはりそれぞれの国や地域によってさまざまな形があるということがわかります。ひるがえって、日本でコレクティブハウジングを行うということを考えた時に、どのあたりがポイントになるのでしょうか？

日本の場合、家を取得するという時に「暮らし」のことを考えるより「資産を取得をする」という意識が強く、暮らしが二の次になっているという現状をどうやって伝えるか、というところがすごく難しいですね。本当は隣が暴力団かも知れないのに何千万も出して買ってしまおうというのはすごく冒険だと思うんです。コミュニティをよく調べてから、といっても新築物件の場合はコミュニティなんてないのだから、「隣がいい人でよかった」というのは当たり外れみたいなものじゃないですか(笑)。それでも買ってしま

新 協同人に聞く

というのは、日本人にとって暮らしが自分の住居の中だけのものという発想になってしまっているのだと思います。ともかく住まい選択の方法が貧困で、皆がそれに疑問をもたない、というところが障壁で、まずコレクティブについて説明をするのにものすごく苦労をするということがあります。

それから、日本にはソフトにお金を払わないという風土があって、設計図にはお金を払ってもコンセプトには払わない、ということがあります。再開発の仕事をやっていた頃も、企画をつくっている段階では費用の単位が何十万、何百万なんですけど、設計図を出して着工となれば何千万、億という単位に変わるんです。そういう例を見ても、これからコレクティブハウスをコーディネートしていく時に、「暮らし方」というすごくソフトなものに対して「誰がお金を出すのか」、「それにどのような価値があるのか」ということをどうやったらわかってもらえるのか。今回の「かんかん森」は事業主¹が「企画と居住者を集める」ということでコーディネート料を出してくれていますが、今後住まい手にもそれは負ってもらいたいです。自分たちがこういう暮らしをするのに学ぶ必要があり、そのためにノウハウを取得しなければならないとすれば、当然コーディネーターの費用も発生する、ということをわかってもらうのにまだ少し時間がかかると思います。

また、ソフトの重要性を訴えていこうとした時に、事業主にも住まい手にもわかってもらう運動をしなければならぬというのも難しいところです。ただ、私たちは住まい手が最も重要だと思っているので、住まい手に話をきちんとしていくことで、日本の住まいの

貧困さに気付いてもらって、「自分たちはもっと違う住まい方をしたい」という人を沢山育てることがキーポイントかな、と思います。行政はコレクティブを「一部の人のもの」と考えるのでお金を出さないし、業者も儲かると思わなければ出さない。でも、住まい手は当事者だから「必要だ」「価値がある」と思えば支払ってくれます。結局当事者になる人ときちんとやり取りする以外に、私たちのやっていく立場はないと思います。

団地・持ち家といった日本の住宅政策の基礎にはスウェーデンのような共働きではなく、専業主婦化を推進するような政策があったように思うのですが、それが受け入れられてきた背景というのは？

歴史もあるでしょうね。江戸時代まではもっと自由で、おかみさんの力も強いし、一緒に働いていかなければ食べていけない状況もずっとあったはずなのに、明治になって突然ヨーロッパの考えを入れつつ日本の国の体制を作ったところで男性社会になった。その影響は大した年月ではないはずなのに、引き



「かんかん森」の協同ランドリー（手前）とアイロン台（奥）

新 協同人に聞く

ずっていますよね。

一方で住宅問題というのは近代化する過程で、農村に住んでいた人たちが都会に出てきて住む場所の問題であったわけですよね。

そうですね。戦後は高度成長期を支えるための労働力を提供するために農家の次男、三男を都会に來させて、家を供給するために2DK、3DKという「モダン」な公団住宅をつくって、そこでの暮らしはサラリーマンと専業主婦というスタイルが最先端だった。それはすごく成功して、何十年かの間で日本の成長を支える仕組みになってしまった。企業戦士と専業主婦は対であり、彼等がつくる核家族と2DKの公団住宅は対であるという政策は工業化を軸とした日本の復興という目標の下に政策としてつくられ、私たちも生活が豊かになるということによってそれを支持してきたということです。そういう環境で育ったマジョリティが今の私たちであり、大家族の形などは知りません。やはり核家族というのはすごい発明だったと思いますよ。外国ではファミリーは大事で、アメリカだって週に3日も夕食に夫が帰らなかったら離婚の原因になるという(笑)。

マズイ!!(笑)ところで、私事で恐縮ですが、私自身の住宅をどうするかと考えた時に、建売りの分譲住宅に何十年ものローンを組むことに全く魅力を感じないのですが(笑)。

結局、「買え」と言っているけど、負債を負ってずっと払い続けるわけだから賃貸と同じですよね。最後に手に入るといっても建物はほとんど老朽化するので、ローンが終わるころにはすごいメンテナンスが必要になってもう一度ローンが必要になる(笑)。「土地が残る」というのが日本の発想なんだけれども、そういう発想だから豊かなスペースにな

らないじゃないですか。20坪とか猫の額ほどの土地を手にしてその限界の中でしか暮らせないとしたら、やはり息詰まるものがありますよね。

「個」と「協同」

と、と思いますが、そうでない発想に不思議となかなか出会えない。

この「かんかん森」が日本初ということからもわかるように、今までも考えてはいても具体化するだけの条件が整わなかった。そのあたりは、ソフトにお金を払わないことや、暮らしについてあまり考えないこと、などとも関連していると思います。さらに言えばこれは文化なのかもしれませんが、日本人は自立すること、つまり「自分が何者であるか」ということをあまりシビアに考えない。キリスト教圏の国にはコレクティブハウスも多いのですが、一神教の「神」と「私」を対比的に捉え、いつでも神の前で正しいかどうかが問われている。日本は多神教で、あちこちに神がいて受け容れてもらえるから個の自立ということにはルーズになってしまう。それは裏返せば「受け容れる」という柔軟性なのかも知れないけれど、そのあたりの良さについても私たちがそれを手法として思えるだけ成熟していないですよ。

コレクティブハウスの準備の過程でも、ワークショップをすると割とみんなすぐに受け容れるんです。人のことを分かり合おうとする。でも、「私は」と主張するのはすごくヘタ。「ちゃんと主張して話し合うからいい結果になる」ということがなかなか出来ない。それは「主張することは品がない」という教育もあるのかも知れないけれど、そこ

新 協同人に聞く

は乗り越えてもらって、「主張したあかつきに受け容れ合う」というところがないと、「個」と「協同」というのは対立にならない。やはり、モノに対して正面から向かい合う、考えようとするという姿勢や、そこを突き詰めてみる、ということが日本では出しにくい。そこがもう少し自由にならないと難しいかな、と思います。西田幾多郎の哲学書に「絶対矛盾的自己同一」という言葉があるんですが、矛盾したものを受け止めることは日本人ならではのかもしれないと最近は思っています。

確かに、普段他人との関わり方などを突き詰めて意識することはないですよ。それはある意味ではいい社会なのかもしれませんが…。

いい社会なんだとは思いますが、何か起こった時に何も引っ掛かりがなくて「つるっ」としている。何かあった時に逃げずに対面できればいいんですが。

協同組合というのはヨーロッパから始まったもので、やはり「個」と「協同」ということを考えてきたのですが、日本で大きく広がった生協運動にしても参加している層はある年代の女性たちと限定されてしまっています。子どもの時からコレクティブハウスで育ち、「個」と「協同」を学んだ人が成人していく、ということの意義は大きいと思うのですが。

家族以外の人たちと生活の場面で出会ったり、深い話をしたり、ということ求めて来ている人たちもいます。なかなか自分でつくりたいところもつくりたいところがありますからね。

新 協同人に聞く

「かんかん森」のできるまで

「かんかん森」を立ち上げるに至った経緯を簡単にご紹介下さい。

2000年の5月頃に日本女子大の小谷部育子²にここの事業主体の社長さんから、高齢者向けのマンションだけでなく多世代が住む住宅をつくりたい、という相談があって、大学の研究室ではサポートしきれないということでNPOを立ち上げることになりました。その前にALCCという研究グループがあって、コレクティブハジングを広めようという運動をしていました。ただ、そろそろ何かやらないとコレクティブは実現しないというところだったので、ちょうど渡りに舟ではありました。

「かんかん森」は全くの企画型で始まって、住まい手をどうやって探すかが大問題でした。そこで建物が出来る荒川区のまちづくり活動をしていた「まちづくりフォーラム」の人たちに話をし、そのネットワークを通じて集まった延べ60人くらいの人たちに「コレクティブハウスとは何か」という話をしました。その内に「住んでも面白いかも」という人が5人出てきて、2001年の5月頃に居住希望者の会が出来ました。

その後はホームページを立ち上げて、それを見てアクセスしてくる人や「福祉マンションをつくる会」というこの計画にかかわっていたもう一つのNPOのネットワークなども通じて、その年の終わりくらいまでには10数人になっていました。その間にも設計は進んでいたのもので、具体的な建物のプランニングのワークショップを繰り返したり、説明会もやっていました。どういう共有スペースをつくったらいいかということなどは話し合いの中で決まっていきました。どうなるか試行錯誤で進めてきてしまったところもあります

「かんかん森」の厨房



が、私たちとしては「プロセスも考える」という形なので、これがいい方法だったかというとまだよく分かりません(笑)。ただ、具体的なプロジェクトだったので、参加者を当事者化するという威力はありましたね。

2002年の1月に地鎮祭、3月に着工しました。予約住戸は11軒で20人弱くらいのメンバーがおり、居住者組合「森の風³」が設立されました。その後は建築ではなくハウスルールやコモンミール⁴についてなど暮らし方のワークショップになりました。また、「カラーワークショップ」という手法を用いて自分のカラーヒストリーというのを作り、自分自身の歴史を色を用いて説明することでお互いを知り、コミュニケーションを深めることも出来ました。

後半は入居が近づいてきて「共用スペースの家具や食器はどういうものを買うのか」といった問題を話し合い、1人当たり17万5千円ずつ出すことになったんですが、引っ越した時や償却、壊れた時の問題、管理費など細かな点を決めていきました。やはりお金のことを考えるというのはすごく大きいですね。また、共有スペースの利用の仕方も具体的な状況をイメージしながらルールを決めるのですが、例えばコモンルームにテレビを置くか

どうかも問題になって、今は置かないことになっています。そういう作業をずっとやって「森の風ルールブック」というのが出来ていくんです。

コモンミールを週3回作るということは最後の最後に決まったんですが、最初は「忙しくて出来ない」とか「1ヶ月に1回」という意見もありました。それが4人で30人分の食事を作るワークショップを全員ローテーションで毎月、計10回やっていったら、すごく楽しくて、話し合いをしながらローテーションを組んでいって週3回というところに落ち着いたんです。

それから、最初は何かを決める時も「世帯」という考え方があったんですが、やっていくうちにそれがなくなっていきました。やっぱり椅子は一人一人に必要なだし、活動も「女房を出したから私は休んでいい」ということにはならず、一人一人が担わなければならない。「世帯で区切れるものはほんの少ししかないね」というのが皆の合意の中から出てきて、一人一人が何を担い、いくら出す、ということになっていったのは面白かったですね。

そのように2年半もかけて自分たちのコミュニティをつくっていく中に、哲学のようなものも生まれてくるように思います。入居まで2年半というのは賃貸住宅としては常識外れなんだけれども、「参加できる賃貸」というのは、住民たちの評価が高い点だと思います。コモンスペースを共同で賃貸するだけでなく、個々の賃貸契約の保証人は居住者組合「森の風」がしています。お互いが連帯保証してるんですが、その仕組みを皆が恐れなかったのは、お互いを知っているからなんで

新 協同人に聞く

すよね。2か月分は預かっているのですが、結局、誰かが家賃を払わなくなった時にも賃貸はしなければならぬので、誰かが払えない時には全員で連帯保証するという事になります。(空室保証はしません。)この問題をまじめに考えると文句が出てもおかしくはないわけで、こういう担い合う仕組みの中でだからこそ通った方法だったと思います。これが最善かどうかはまだ検証中ですが、こういうスペースを共同で賃貸するといった途端に連帯保証という方法も入ってきてしまうということで、今回は選択したんです。

最近一番トラブルになっているのは、ジェンダーの問題です。ジェンダーの講習会は一度やったんですが、いわゆる「おじさん」が若い女性に「お茶入れてくれ」と言ってしまう(笑)。「自分のことは自分でやってください」ということなんですが、よくおじさんは「お姉ちゃんが入れてくれるとおいしいな」なんてバカなことを言ってしまう(笑)。結局そういう話は一般的にはよくあることなんですが、住まい手に女性が2/3と多く、その中にもいわゆる「男社会」や「男」というものに対してアレルギー反応のようなものがあって、居住者組合の役員を決める時にも男を排除しようという動きが起こったりする。やはり「さん」という「個」に起因するものであって、十把一絡げに「男は」と言ったときに「そんなこと僕はしません」という人はすごく被害を受ける。「それって逆セクハラだよ」と言うとかわかってくれるんですが、「男」と言われると「女対男」ということになってしまうところは、日本の社会がまだ古いということかも知れません。

また、役員を決める時のいわゆる「根回

し」というような日本的なやり方も、どうしても引きずっていたりして「ここでは違う形だ」ということを相当に意識していないと、途端に風通しが悪くなって、「森の風」の心地よさが壊れてしまう、ということをも身をもって知らないとその距離感を維持していくのは難しいですね。

新たな挑戦を

最後になりますが、宮前さんは一級建築士で都市計画の仕事がご専門で、キャリアも積まれてきたわけですが、コレクティブハウジングという非常に不安定で、収入面でも厳しい道に飛び込んでおられます。そこを突き動かすエネルギーは何なのでしょう？

こういう暮らし方や生き方の選択もある、ということが私にとっても救いだったんですね。コレクティブは人が自由に生きられるひとつの選択肢だと思っているものだから、どうしても日本の中にその選択肢があったらいい、と。「自分が住みたいか？」と聞かれると、もちろん住みたいけれども、それよりもこの仕組みを日本の中で使えるようにしたいというのが、一番大きい私の「エネルギー」の源だと思うんですね。自由に生きていくために「担う、責任をもつ」ということが、コレクティブハウジングの仕組みには、埋め込まれているんですよ。「ソフトとハード、運営と空間」が両輪としてきれいにととのっているものというのはあまりないんです。そういう意味ですごくいい仕組みだと思っているから、もっと知ってもらいたいし、できればこういう暮らし方にチャレンジしてみることが出来るチャンスを広げられると、もっと皆生き生きと暮らせるんじゃないか、と思っています。

今後の展望などは？

私あまりお金もないのにこんなことをやってきたのは、とりあえずひとつつくってみたいことには理解してもらえないし説明も出来ないから。ひとつ実現して問題もあるけれどもすごく可能性もあるということを感じています。また、見学に来る人たちの反応もよく、行政や公団の反応もあります。すごく興味を持つ方が多くて、「とにかくコレクティブハウスについてもう少し聞かせて欲しい」とか「事業化の相談をしてみたい」とか、それだけいろいろな人に知ってもらえたことがよかったですと思います。また、住まい手自身の力で実現する可能性もあると思います。

住まい手によって全部パターンが違うと思うので、別のところにつくる時はまた別の特徴のあるものになっていると思います。いくつかネットワークして引っ越していけたらいいですね。今は「多世代」と言っていますが、もっと子育て世代が集まったプロジェクトが出来てもいいと思っています。子育てが終わったら熟年コレクティブに変わってもいいわけだし、ある程度住む人たちによって柔軟性を持って次々とつくれたらいいなと思います。

夢が広がりますね。

今年はNPOとしても専従経費をつけて、継続性があるような形を持てるかどうかの正念場だと思います。去年は専従費なしでやってきたわけだから(笑)。やはり採算性や経済性がないと続けていけないので。会費や出資のような形で協同組合のように成り立っていくほどのパイはないかもしれませんが、ある程度は可能性はあると思います。ただ、会費で成り立つNPOはまだまだ少ないので、事業型のNPOとして何百万というお金を動かしながらきちんとやっていけるか、というのもひとつの挑戦かもしれませんね。

(宮前さんをお招きして研究会を行います。日時：2003年7月26日(土)13:30～、場所：東京労働会館)

(注)

- 1 (株)生活科学運営
- 2 コレクティブハウジング社理事長、日本女子大学教授
- 3 かんかん森居住者組合の名称
- 4 居住者全員がローテーションで夕食の準備、後片付けなどを共有のキッチンで行う。

[参考文献]

- 「コレクティブハウジングのすすめ」 小谷部 育子 丸善 1997年
 TOTO通信 1995年SEP-OCT VOL.11

コレクティブハウス「かんかん森」(2,3階のフロア)



NPO コレクティブハウジング社
 〒171-0022 東京都豊島区南池袋1-3-3
 ヒルズガレ 4F
 TEL03-5911-6971 FAX03-5911-3919
 E-mail info@CHC.or.jp
 Url=http://www.CHC.or.jp/